

2026年2月

考古 No. 32

けんぱくものしりシート

だいたろういせき

へいへい

台太郎遺跡の平瓶



これは台太郎遺跡（岩手県盛

岡市）の7世紀後半（1,300年以

上前）の住居跡から見つ

つた須恵器です。

須恵器とは、高温な窯の中

で焼かれた、やきもの一種で、

いろいろな形のものがあります。

このような、丸い胴体の中心

から少しずれた場所に注ぎ口が

つく形のことを「平瓶（※）」とい

い、おもにお酒の容器として使われま

した。部分的につやがあり、つるつるして

います。いっしょに見つかった他の土器には、つやはありません。

この“つや”はどのようにしてできたのでしょうか？

やきものは草や木を燃料にして作りますが、植物の体の中にはガラスと

同じ成分の「ケイ酸」がふくまれています。これはガラスと同じように高温で

とけ出します。窯で燃えた草や木が、灰にな

ってやきものの表面にくっくと、灰の中

のケイ酸が溶け出して表面をおおい、ガラ

スのまくを作るのです。これが、“つるつる、

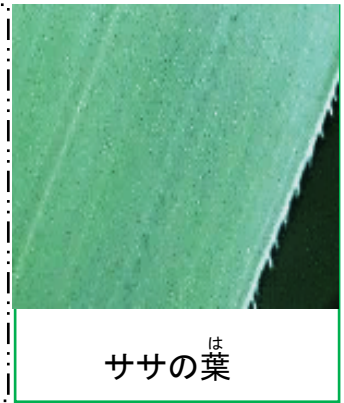
つや”の正体で「自然釉」と呼びます。

※「へいへい」の他に、「へいべい、ひらか、ひらべ」などの読み方もあります。



どうして灰の中にガラス質のものがあるの？

植物は、ガラスのもとになるケイ酸を根から吸収し、体にたくわえています。特にイネ、ススキ、ササなどのイネ科の植物は、ケイ酸でできたガラス質の細胞を多くふくみ、葉の筋や、とげなどを硬いガラス質に変えて体をじょうぶにしています。葉っぱで手を切ってしまうことがあるのは、そのためです。



台太郎遺跡の平瓶は、材料の土を分析した結果、現在の静岡県湖西市周辺で作られたことが、わかっています。

湖西市周辺では、5世紀から12世紀にかけて須恵器を作った窯がたくさんあり、岩手県をふくむ東日本に製品が運ばれていました。

この平瓶が作られた7世紀には、岩手県ではまだ須恵器の窯はなく、野焼きで土師器(素焼きの土器)が作られていました。

窯より温度の低い野焼きでは自然釉ができなかつたので、遠くから運ばれてきた、つやの美しい平瓶は貴重品として大事にされたことでしょう。



引用・参考 盛岡市遺跡の学び館 2017年『盛岡市遺跡の学び館第15回企画展 “志波城前夜”の蝦夷(エミシ)社会—9世紀初頭以前の盛南地区—』/ 九州歴史資料館 2023年『九州歴史資料館展示解説シート90 釉薬の基本』他

- 「けんぱくものしりシート」の内容は発行当時のものです。
- 「けんぱくものしりシート」は解説員が執筆しております。



岩手県立博物館

〒020-0102 岩手県盛岡市上田字松屋敷34
Tel. 019-661-2831 Fax. 019-665-1214

岩手県立博物館

検索

HPIにてバックナンバー公開中！

『台太郎遺跡の平瓶』

2026年2月発行

■参考文献

- ・九州歴史資料館 2023年『九州歴史資料館展示解説シート90 釉薬の基本』
- ・盛岡市遺跡の学び館 2017年『盛岡市遺跡の学び館第15回企画展 “志波城前夜”の蝦夷(エミシ) 社会—9世紀初頭以前の盛南地区—』
- ・NHK for School 『ミクロワールド』「植物の宝石 プラントオパール」(初回放送2021年)
https://edu.web.nhk/school/watch/outline/?das_id=D0005100112_00000